

道 標

どうひょう

d o h y o

年間特集 「おしえ」

第四回・完結しない建築を目指して 竹原 義二さん

連載

あなたのいのちの物語

伝承を科学する

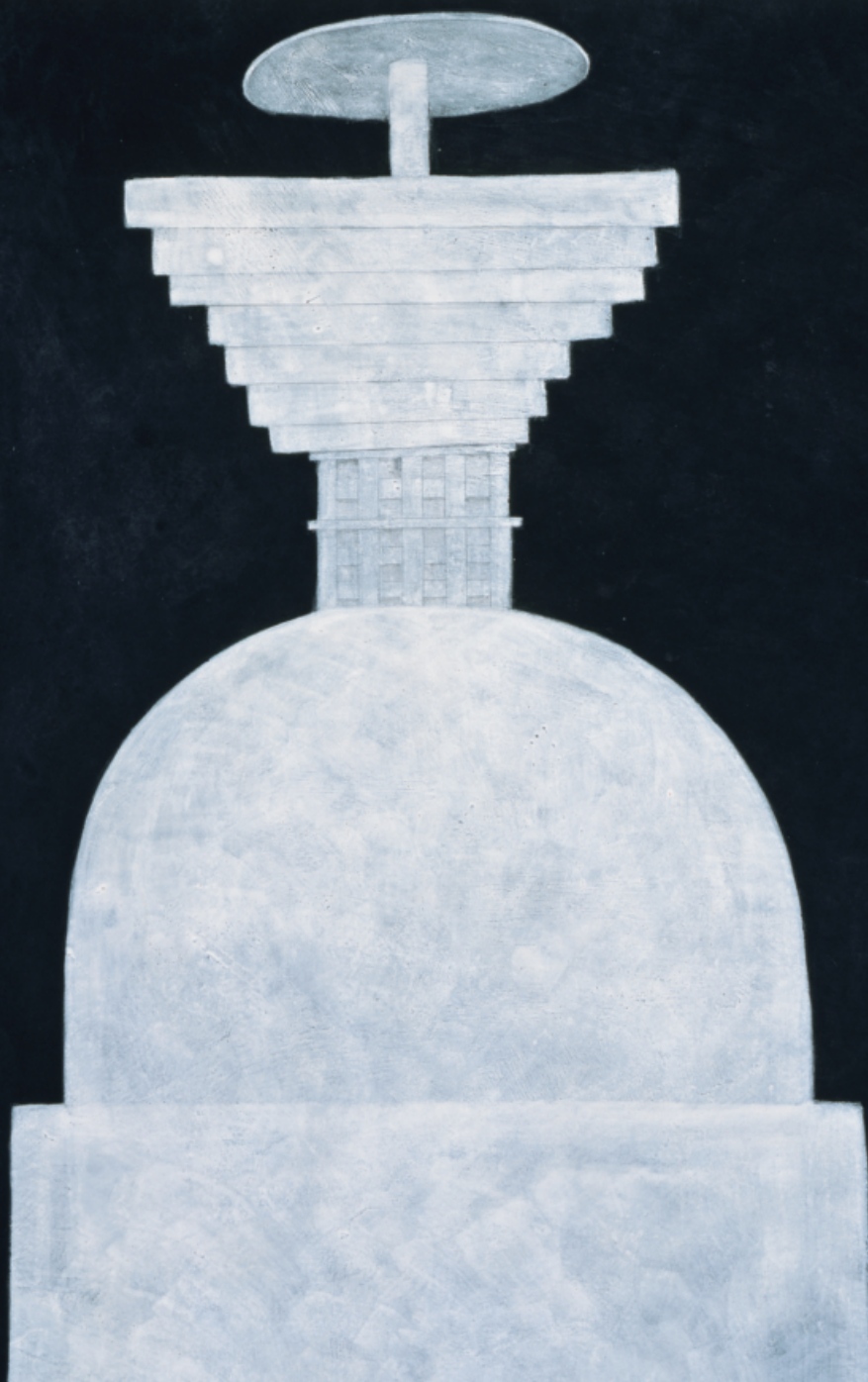
道しるべ

なにも怖れず生きていく

鉦の響きが呼び起こす風景

隠された「歌詞」

2025 秋季号





私は建築というものを通じて様々な人と出会い、その出会いから多くのことを学ばせてもらいました。私は石井修先生の弟子になって、修行を重ねてそこから独立していくのですが、建築家 石井修は、時代を先取りしている人でした。例えば住宅の上に緑を乗せて、緑の中に住まいが埋まっているような家が良いと考えるような、建築物だけでなく緑も重要な要素として扱う人でした。それは近代建築の三大巨匠、フランス人のル・コルビュジエとい

う人が最初に提言したのですが、それまで日本では庭は「見て楽しむもの」「歩いて回遊して楽しむもの」でした。建築の形をストリートに表現していくのではなく、建物が自然や植物のなかに埋れるように見え隠れするように配置されたら素晴らしいのではないかと。例えば自然が残されたなかに建築をつくる時、地面から取り出された石などは建築物に積極的に利用する。また石や植木があれば撤去や伐採をせずに迂回し石や木をできるだけ壊さない。

建築はその場所の環境の中につくらせていただいて、そこに私たちは住まわせていただくと考えると、自然と融合していく。自然の方が大事だから、そっちを優先しながら一緒につくる。建築というのは破壊していくよりも自然物に返していく。

そんな考えを持っている人が私の師匠でした。

人から学ぶというのとは、いろいろ教えてもらう、伝授されるということよりも、いつも話をしたり、その人を見て「ああこのように決めている人なんだな」ということを真近に見るということが大事なんだという

ことを師匠から教えてもらいました。その後石井修 美建設設計事務所から独立し事務所名を決めるのですが、私が育った家は般若心経を毎朝唱えている家でした。幼少の時からそれをずっと聞いていました。そしてひと月に一回は必ず四国八十八ヶ所などのお寺へお参りに行くので連れて行かれる。その般若心経に出てくる「無から有」を生み出す言葉が好きでした。無いものから有るものを作り出す力。そういうことが大事なのではないかと思っていました。

それと三島由紀夫氏の「豊饒の海」で「無有」という言葉が出てくるんです。昔から書道や文字の動き方、間合いの取り方などにすごく興味があつて、神社や仏閣の扁額の板の中に書かれている字体を見るのが好きでした。

その「間」がぴたっと合っているものを見た後に仏像の前に座り、周りに余白がある空間を感じとる。どうしてこんなに



心地いいのだろうって、そんなことを経験していたので事務所名は、無から有を生み出すことにしよう。漢字二文字で無有建築工房と名付けました。

事務所を始めて20年が経つ頃、恩師より「大学で教鞭を執らないか」という話がありました。「教えるというよりも、自分が今何考えているのかを来て話すだけでいい」と言われ、それが今も続いている黒板授業です。授業の前に、教室の前面にある6メートル程の黒板に、定規など何も使わずフリーハンドで図面を描いていく。黒板を使って学生らに、この建築がどのように作られたのか、そこから話していきます。例えば古い建築を説明するとき、その建築の歴史から前後の関係を解き明かす。同じように見える神社仏閣なども、その建物で何が一番大事かということを見つけ出す。なぜこの建築がそんなに魅力的なのと

「無から有」を作り出す力、そういうことが大事。



いうところを解き明かさないとわからない。時代を読み解くことから学ぶのです。見方が変わってくると、

建築のあり方も変わるし、場所の選び方も違うということを黒板授業を通して建築の面白さを追いかけています。そして学生らと一緒に実測を行う授業を続けています。自分の手で寸法を測り、図面をおこすことによって、建築の成り立ちを深く考えることになり、その本質や素材の根拠を見つけ出す作業でもあります。その建築が出来上がった時点で少し

ずつ遡っていくことができ答えるわかつてきます。自分の目で確かめてみてそれを何度も見直しながら紙の上に描いてみてそこからその建築の本質に近づいていく

のだと思います。

古い建築には積み重ねられた時間があります。そこで営まれた生活、物が朽ちていく美しさ、伝統的なしきたりや技術などが時代を越えて蓄積されている。また移ろう光や四季の変化など、掴み取ることができない現象を受け止める工夫があり、そこに住み心地の良さが生み出されている。

現代は新築よりも、在るものを活かしたりノベーションの時代です。リノベーションでは、経過した時間の中で形態が変化しているものは減築したり、余分な箇所をなくしたり、元に還していくという、作ったものを潰すのではなくて、元はもつと良かったのではないか、そういうことを紐解いていきます。

時代や家族の変化により住まいには、足し算と引き算が行われ古いものに新しいものが付加され、違うものが生まれていく。それが時間のつながっている生活の時間軸だと思えます。出来上がった時からその前

生活をしている住人が時間をかけて完成させていく建築。

をたどっていけば、そこに必然性があって出来上がってきたいるのが分かってくるのです。それがなかなか、今の近代建築にはないんです。

建築というのは何度も考え出せる力をもつので、急にできるものでない。何度も繰り返し繰り返し考えを深める。しかしいつかは決めないといけないので決断をする。でもその決断が完成や百点ではなく、使う人が「この方がいいな」と思うように変えていくことができるよう余白を持たせています。

一般的には完成した住まいから家族の暮らしが発発すると思いますが、でも私の建築はある意味、未完成。もちろん完成はさせています。それは、ただ単に戸が閉まるとか見えがかりのことであって、実はその中で生活をしている住人が時間をかけて完成させていく、持続させていくものだと思うっているのです。

ル・コルビュジエは「近代建築の五原則」という原則を作って、モダニズムの中で新しい建築術を築い

ているのですが、結局は元の原型の形に還って、最後は終えていく。

人間、新しいことをいろいろやりますが、最終的には死ぬ前にはみんな「元の昔から続いてきているものがないのではないか」と思うのではないのでしょうか。

食事にしても日本人が編み出した季節ごとのものが一番おいしい。昔から続いているしきたりとか、決められたことが守られていく方がずっと幸せにできるのではないかとこの年になると思うのです。(笑)

建築は楽しい仕事です。無から有を生み出す仕事は完結しないから続いていくのかなと思ったりもしています。

竹原 義二(たけはら よしじ)

建築家。1948年徳島県生まれ。建築家石井修氏に師事した後、1978年無有建築工房設立。大阪市立大学大学院生活科学研究科教授、摂南大学理工学部建築学科教授を経て、現在、関西大学環境都市工学部建築学科客員教授。日本建築学会賞教育賞・日本建築学会賞著作賞・村野藤吾賞等多数受賞。近年は幼稚園・保育所、障がい者福祉施設、老人福祉施設など、人が生き生きと暮らす空間づくりを追求している。

Your Spiritual Stories
あなたの物語
いのちの物語

30話目

なにも怖れず生きていく

深沢七郎

「安芸のやぐもうた」

盲目のおタミが主人公だ。「今日はこの夏でいちばん暑い日になるだろう」と思うおタミだが、外を通りかかる人の「あんまさんも、行くかのう」という声が聞こえる。「今日は、みんな、そこへ行って、大勢で揃って街を歩いている、あの日の出来事を騒ぐ日」だと。だがおタミが行くはずもなく、通りがかる人もそのことはわかっていておタミを慰めるように言っているのだという

もう五年以上も前だが、天に白い雲が現れた。そして、タミは目が見えなくなつたのだ。その雲はタミの視力を奪つただけではなく、二人の孫もとられてしまった。昔、遠い島からこの土地に嫁に来た頃、街の角でアメ屋が歌っていた唄を思い出す。

やぐもまつ、いずもやえがき妻ごみにやえがき作るそのやえがきを

スサノオノミコトがクシナダヒメを娶る時の歌として『古事記』に出

てくる歌だ。雲が湧き出る「出雲」という場所を讃えながら妻を迎える喜びを歌つたものだ。ところが、タミにとっては、出雲ならぬ安芸（広島）の土地に突然聳え立った「やえぐも」は孫を奪いに来たものだった。やぐもまつ、あきのやえぐも孫取りにやえぐも作るそのやえぐもを

おタミは人が変わってしまった。その日、二人の孫には「みょうどうさま」のお守りをもたせたが、それが役に立たなかったことを知つておタミは守り札も、「みょうどうさま」も信じなくなつた。息子の茂雄も取られてしまったが、茂雄への思いも変わってしまった。茂雄は義理だとか、恩だとかを重んじる男だった。茂雄のやくざ仲間も義理だとか恩だとか言っていた。ところが、今のおタミは義理があるから香奠を差し出す、などということとはしなくなつた。義理だとか、交際だとかと思うだけでも、茂雄を思い出してしまいいやになる。

通りで騒がしい声が聞こえるその暑い日、おタミはアンマを頼みに来た客の肩を揉んでいる。そのおタミの見えない目にあの七色の雲の光景

が浮かぶ。その雲の中に孫や茂雄の顔も浮かんでくる。そのとき、おタミは「ひよつと」自分の姿に気がついた。

「義理だとか、恩だとかと言つていた息子の茂雄とは全然、違つている自分に気がついたのである。息子も娘だちもいなくなつたし、孫だちもいないが、ただ一ツ、おタミはかく抱えているものがあつたのである。あの七色の雲が現れた時から、ただ一人で生きていくことも怖れないがある。死んでいくことも怖れないが、一人だけで生きていくことも怖れない。なにも怖れない自分のちからをかく抱えているのである。」

「あの雲ん中には神様が」とおタ



ミは思う。「雲の中には一人で生きることが教えてくれた不動明王のような神が住んでいるのだと気がついた」。そこへ七色の雲の被害の救済事業の資金集めの人が、針を売りつけにくる。「お守りもある」という。「シート」とおタミの口からツバが飛んだ。これがこの短い物語の結末だ。

偶像に寄りかからない姿勢がからだにしみ込んでいて、固い信念になつている、戦後日本にそのような精神基軸があるはずだ。作者はつぶやくようでもあり、不遜にも聞こえる語り口でそう訴えようとしているようだ。

島蘭進（しまぞのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、龍谷大学・大正大学客員教授、曹洞宗総合研究センター講師。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを、つくつて、もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語ではどく』（2016年、NHK出版）がある。

伝承

科学

する

鉦の響きが呼び起こす風景

鐘と鉦。どちらも「かね」と発音する。鐘のほうは、お寺の大きな釣鐘をイメージすればよい。ゴーンと長く響く音は、時を刻む合図の働きだけではなく、聞く人の心を鎮める働きももっている。それに対して鉦は、まったく異なる響き方をする。その響きは、祇園祭の鉦の「コンチキチン」のように、鋭く短く、耳に突き刺さる。鉦には様々なサイズがあるが、直径二十センチ程度のものが一般的だ。首から吊るして撞木を使って打ち鳴らし、南無阿弥陀仏を唱える姿は、歴史の教科書にも登場する空也上人立像（六波羅蜜寺所蔵）でも有名だ。空也上人や一遍上人による念仏は踊り念仏と呼ばれてきた。踊り念仏は、足踏みを伴いリズムミカルに念仏を唱えるが、リズムを刻むには、残響がすくない鉦の音がより適切だったのだろう。

能楽において、主役がこの鉦を首に下げて舞台の上で実際に鳴らす作品がある。世阿弥の息

子の元雅の作とされる〈隅田川〉である。行方不明となった子を探するため、母（主役）は芸をすする物狂いの姿となって、京都からはるばる東海道を下り、やがて隅田川にたどりつく。隅田川の渡守は、乗船者らに、人商人に連れられた少年が、対岸で息を引き取り埋葬されたことを語る。女は、それが我が子であることを知って愕然とし、絶望する。船が到着した対岸では、大念仏

がおこなわれていた。母を墓所へと案内した渡守は、「母の弔ひ給はんをこそ、亡者も喜び給ふべれ」と言い、鉦を母に渡し念仏を勧める。母は、自ら鉦を打ちながら、四句の念仏「南無阿弥陀仏」を皆に合わせて歌い続ける。するとそこに、我が子の声が聞こえる。姿も「みえつ隠れつ」する。だが、抱き抱えようと近づけば消えてしまう。やはり幻であった。

世が明けると「我が子と見えしは、塚の上の、草茫々として、ただ標しばかりの浅茅が原」の風景が残るばかりだった。

仏教民俗学者の五来重氏によると、この風景は、歌舞伎踊りの創始者とされる出雲のお国の踊り念仏の芸と良く似ている。お国の踊り念仏は死者をしのぶ歌である。歌と伴奏する鉦の響きにひかれ、お国の前

には、今は亡き美男子である名古屋山三の亡霊が出現する。まるで〈隅田川〉における法要の場面にそっくりの風景である。

日本の各所における伝統的な踊りでは、大小の鉦がよく打ち鳴らされる。合わせて歌われる歌はさまざまだが、伴奏となる鉦は、リズムをとるだけのものではない。その響きは、南無阿弥陀仏の声を想起させるのである。そこには亡者が現れて、一瞬の時間を共に過ごして救いを得るのである。そのような亡者救済の風景を、われわれの心の深層から呼び起こしてくれる力が、鉦の響きにはある。

藤田隆則（ふじた・たかのり）

一九六一年、山口県生まれ。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。研究対象は、能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能のノリと地拍子』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えるための応用的研究に従事。



「隅田川」（河鍋豊画『能楽図絵』2
国立国会図書館ウェブサイト
<https://dl.ndl.go.jp/pid/859441/1/21>

◆隠された「歌詞」

しばらく前に小学校唱歌「月二日」(年の初めの例しとて)の内容について紹介した。今年(昭和)二〇〇年、敗戦八〇年、平和についてさまざまな行事が展開されると思う。そこで、もう少し唱歌の問題を顧みたい。

二〇二五年六月三日「沖縄慰霊の日」を前にした、六月二日の朝日新聞に「螢の光」の歌詞についての記事が掲載された。

私自身、小学校の卒業式以来、単純に「別れの歌」と思い込んでいた。そのようなことで歌詞全体を見直したことはなかった。

「螢の光」 稲垣千穎 作詞

- 一 螢の光、窓の雪、書讀む月日、重ねて、何時しか年も、すぎの戸を、開けてぞ今は、別れ行く。
- 二 止まるも行くも、限りとして、互に思ふ、千萬の、心の端を、一言に、幸くと語り、歌ふなり。
- 三 筑紫の極み、陸の奥、海山遠く、隔つとも、その真心は、隔て無く、二に盡くせ、國の為、千島の奥も、沖縄も、八洲の内、護りなり。
- 四 至らん國に、動しく、努めよ我が兄、恙無く。

このように単なる別れの歌ではなかった。兄、夫、父を戦地へ送り出す別れの歌だった。それも、重なる戦争によって領土が拡大してゆくにしたがつて歌詞が変更されてきた。今日、「八洲」と書いて「やしま」と読め、日本のことと理解できる人も少なくなっているだろう。

特に四番の歌詞は作詞当時(八八年・明治十四年頃)は「千島の奥も 沖縄も 八洲の外

護りなり」。それが、日露戦争後(一九〇五年)には「台湾の果ても 樺太も 八洲の内、護りなり」と変え続けられた。この歌詞が教育界をリードした現実を隠してはならない。外に、現在は三番までしか歌われない「我は海の子」(作詞・作曲者不詳)も同様の意図が込められていた。

- 一 我は海の子白浪の、さわぐいそへの松原に、煙たなびくとまよこそ、我がまかしき住家なれ。
- 二 生まれてしほに浴して、浪を子守の歌と聞き、千里寄せる海の氣を、吸ひてわらへとなりけり。
- 三 高く鼻つくいその香に、不斷の花のかをりあり、なぎさの松に吹く風を、いみじき樂と我は聞く。
- 四 丈餘の櫓權操りて、行手定めぬ浪まくら、百尋千尋海の底、遊びなれたる庭廣し。
- 五 幾年ここにきたたる、鐵より堅きかひなあり、吹く鹽風に黒みたる、はだは赤銅さながらに。
- 六 浪にたふふ永山も、来らば来れ恐れんや、海まき上ぐるたつまきも、起らば起れ驚かし。
- 七 いで大船を乗出して、我は拾はん海の富、いで軍艦に乘組みて、我は護らん海の國。

何時しか隠された戦意高揚の精神、殺し合いを正当化させる恐ろしい意図が込められていた。今、言葉だけの平等、無責任な自由、限られた平和と豊かさのなかで、大切なものを見失いつつある世の中に、恐ろしいうねりは再び近寄ってきている。ブッダの「如何なる者も殺すことなかれ。また、殺させてもならぬ」の金言の重さを思い知るべきである。

編集後記

今、大阪で万博が開かれている。賛否両論の中始まったが、盛況なようである。安心した。私も2度行つた。

さて万博の始まりは日本の明治維新の頃と聞く。その頃、日本は「国のかたち」を変え、産業革命を導入、近代化が始まる。「富国強兵」政策である。進歩、発展、自由、西洋的な価値観を是とし、でもその考え方は大陸進出、その後の数々の戦争に繋がっていった。

今、世界は危機に瀕している。異常気象、核の脅威、環境破壊、それはいままでの帰結点なのかもしれない。

年間特集「おしえ」の最終回を建築家竹原義二氏にお願いした。氏は建築を通して世を見つめ、人を見つめ、ものを見つめられている。そしてその本質を掴もうとされていた。そこには日本人のもつ自然に対する感性、ものを活かす心、そして生きるということ、死ぬといふことの死生観が込められていた。それは先人が見出した知恵であり、それが伝統なのである。今一度、我々はその『おしえ』を謙虚に学び直す必要がある。なぜならそれは万博のテーマ「持続可能な社会の実現」、危機からの脱出の糸口と思われるからである。

合掌

表紙の絵 STUPA

釈尊は80才で入滅されますとインドの慣習にのっとり荼毘に付されます。当時の北インドのマガダ国やコーサラ国など八ヶ国に遺骨を分け、それぞれが土饅頭形の仏塔をつくりました。出家者には必要のないことですが在俗信者は礼拝の対象が欲しいので仏塔(ストウパ)がつくられました。そんなことで仏塔は墓ではなく、釈尊そのものとして礼拝されます。今回の絵は西インド、ロナワラ周辺にある、いくつかの西暦前2〜1世紀の石窟寺院にあるカルーラの仏塔を描いたものです。堂々とした崇高なものです。日本の仏塔(塔)は屋根の上の部分が本来の仏塔の形です。日本では相輪または九輪として九つの輪がついていますが、それは浄土教九品説によるもので、本来インドでは傘蓋はつか三つで、傘は大切な方にかけるものです。三つは仏・法・僧を表しています。

畠中光享(はたなか こうきょう)

日本画家/インド美術研究家
/真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ <http://ntbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)